

登山や人生をらせん進行に。高齢化を逆手に

OWCC 中川和道 20220519

学問の世界のことだ。ある研究会で、学問人生には5つの時代（or 段階）がある、という主旨の講演を聞いて、登山でも同じようなことがあるのに気がついた。それを書こう。「学問」と「登山」とを用語変換してごちゃ混ぜに書くので、読み替えていただきたい。

その方が言うには、5つの時代とは、1.黎明(れいめい)の時代→2.確立への時代→3.完成の時代→4.ドグマ(独断)の時代→5.滅びの時代、がよくある一般例だという。ある新しい登山を始めたデビュー当初は「1.黎明(れいめい)の時代」。珍しがられ、何をやっても「新しくて、面白いですね、次は何を？」と注目が集まる。その次が「2.確立への時代」。だんだんサマになってきたじゃないか、とかの評価が積み重なっていく。やがて、これこそが君の登山だね、君のスタイルだ、「3.完成の時代」に来たんじゃないか、おめでとう、と言われるかもしれない。この後は、さてどこまで行くの？と人々は毎回々々、うの目たかの目で見つめる。中川も山行記録をこまめに書いて来たので、いろいろなコメントを聞いて過ごした。『山と仲間』の中川の山行記録をフォローしました、というすごい方にもお会いして感激した。

第2第3段階の頃がいちばん楽しい。積み重ねてきたものが、そのレベルでは、一見、報われるからだ。訓練時代の苦しいボッカとか、苦しいクライミングとか、苦しい読図とか、天気を読み込みにと失敗した体験などが、急に成果に転じる。身の丈にあった登山教室を担当することもあり、自分でもひとのためになれるのかと思うこともあるだろう。

問題は第3から第4段階だ。自分が積み上げてきたことが、自分が積み上げてきた範囲を超えて適用可能な面もあることに気づくのだ。すると未知の雪崩に自分の経験を強引に適用するなど、危険な側面に誘惑される。学問と同じで、新しいことに飛び込むとは、今まで誰もやってないことを初めてやることだ。「前例がない」との批判は当然多い。だが「前例がない」ことでなければ進歩はない。自分が積み上げたことに確信をもちつつも、他方では「分からないことだらけ」との謙虚さを失わない目を保つ。これは難しいことだ。多くの場合、人は、自分が積み上げてきたことを過信して「自分はいくまで正しい」という独断すなわち第4段階に至ってことごとく失敗し、第5段階：滅びの時代へと向かうことが多いという。エンゲルスという天才が書いた本『自然の弁証法』だったかにデューリングという学者が新しい学問創造に挑んで、ど失敗した話が出てくる。中川は若いころこの本を読んで打ちのめされ、「あなたの仕事は全部間違い」とはならない仕事ができるだろうかと就職をためらったほどだった。

中川は高齢クライマーになった。著しい体力低下のせいで失うものばかりだ。だが、そのおかげで、ありがたいことにドグマにはもう走れない、とポジティブにとらえたい。さらに5つの時代をらせん構造に組み変えて滅びの時代を避け、滅びの上部位置に別の黎明を見出して、自分なりに山を楽しく続けてみたいと思う。このエッセイのタイトル「山楽登山の世界」の原点である。

(つづく)